

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：33303

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26560030

研究課題名(和文) 里帰り分娩後から1か月間における初めて母親・父親となった夫婦の3人家族作りの体験

研究課題名(英文) Process to raise loving family for couples who had their first baby after one month separation due to child birth at wife's parents' house

研究代表者

保田 ひとみ (BODA, Hitomi)

金沢医科大学・看護学部・講師

研究者番号：00363119

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)： 里帰り分娩は、親からの支援を受けることができる一方、夫の家事育児の減少、夫婦関係や父子関係への影響が懸念されている。そこで、妻が里帰り分娩から自宅へ戻った後1か月における、夫婦の3人の家族作りの体験を、質的記述的研究法を用いて分析した。結果、夫婦は、里帰り分娩をして良かったと捉えており、実家の支援を受けながら、里帰り中は、「頻繁な連絡により夫婦関係・父親の意識を高める」、自宅へ帰って1か月後の頃では、「夫婦が互いに気遣い、初めての子どもを育てていく」という体験をしていた。

研究成果の概要(英文)： Staying at wife's parents' house after giving birth is good for wife because she can receive support from her parents. However, husband has fewer chances to join house work and child care, resulting poor spousal relationship and father-child relationship. Therefore, in the present study, we aimed to investigate process to raise loving family for couples who had their first baby after one month separation due to child birth at wife's parents' house. The study was designed on qualitative descriptive research methods. Following results were obtained: couples satisfied their decision that wives stayed at her parents' house to give birth. Because they could maintain good spousal relationships and husbands rose consciousness as a father through frequent contact with wife and infant during living apart from them. The couples showed consideration for each other one month after returning home, which made for them to be loving family.

研究分野：母性看護学・助産学

キーワード：里帰り 母親 父親 夫婦 初産

1. 研究開始当初の背景

里帰り分娩は、産後の身体回復や育児不安の解消などに利点があるため、産後の母親は親からの支援と安心感を求め実家へ帰ることが多く、島田ら(2006)の平成16年の全国調査では約6割に見られている。一方、里帰り分娩の欠点として、夫による産後1か月の家事育児の援助の減少や、夫婦関係と父子愛着への影響などが懸念されている。しかし、これらは母親を対象にしたものが多い。

そこで本研究は、妻が里帰り分娩後自宅に戻った後(以下里帰り分娩後)から1か月間における、初めて母親・父親となった夫婦の3人の家族作りの体験を検討する。

2. 研究の目的

里帰り分娩後から1か月間において、初めて母親・父親となった夫婦は、どのような気持ちで3人の家族作りを行っているのかその体験を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)研究参加者は、第1子を里帰り出産した母親とその夫である。

(2)研究デザインは、質的記述的研究である。

(3)データ収集

内容：夫婦それぞれから基本的情報を得た後、半構成的面接により、3人家族作りのために夫婦それぞれが体験している「里帰り中および妻が自宅に戻ってから1か月間における夫/妻に対する気持ちと行動、自分自身および第1子に対する気持ちと行動」について尋ねた。

時期・場所：妻が里帰りから自宅に戻った1か月後に、夫婦の自宅で行った。

(4)分析方法

面接内容から逐語録を作成し、夫婦それぞれの3人家族作りのための気持ちや行動に焦点を当て、コード化した。次にコード同士の相違点、共通点を継続的に比較しながら分類してサブカテゴリーを抽出し、更に抽象度を上げてカテゴリーを抽出した。

(5)本研究は本学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1)対象の背景

本研究に同意が得られた夫婦は5組であった。妻と夫の年齢は20歳代前半から30歳代前半であった。妻の職業は、3人は無職であり、2人は育児休業中であった。夫は全員が常勤勤務者であった。その内2名は不規則勤務であり、3名は職場が遠方のため週末または休日に帰宅していた。

里帰り先は、5組とも妻の実家であり、里帰りの主な理由は、初めての出産のため親から支援を得ることであった。里帰りの希望は4組は夫婦共に希望であり、1組は妻の希望を夫も承諾していた。面接の時期は、妻が自宅に帰ってから1か月後であり、産後2か月~4か月であった。面接は、自宅で夫婦一緒に行った。

(2)分析結果

里帰り分娩後1か月間における、夫婦の3人家族作りの体験として、3つのカテゴリーが抽出された。以下、カテゴリーは「」で示す。

妻の里帰り中：「頻繁な連絡により夫婦関係・父親の意識を高める」

夫婦は、日頃からコミュニケーションアプリ、メールや電話などをおして頻繁に連絡をしており、里帰り中も「里帰り中だから」という理由ではなくこれまでの生活の延長で頻繁に連絡をしていた。

出産後は、妻は夫に子どもの写真や動画を毎日送り、子どもの様子や成長を伝えていた。夫も写真を送ることを求めたり、妻と共に子どものかわいらしさを共有したりしていた。

里帰り分娩については、里帰り分娩に伴う、遠距離、交通費、生活の違いなどの欠点はあるが、実家では妻がリラクセスでき、親が分

からないことを教えて支えてくれる安心な環境という利点は大きく、夫婦共に親に感謝し、里帰り分娩をして良かったと捉えていた。

妻子が自宅へ帰った頃：「初めての育児・家事の両立への期待と不安」

妻子が自宅に帰って来る1~2週間前になると、夫は妻から頼まれていた自宅の片づけを始める場合と夫が自ら掃除を始める場合があり、それぞれの妻は、夫への信頼と感謝の気持ちを深めていた。また、子どもが自宅に帰った時に困らないように、あらかじめ夫婦で相談し、夫が前日に子どもの荷物を自宅で準備している場合もあった。

夫は妻子が自宅へ帰ってくることを待ちわびており、喜びが大きかったが、初めての育児については少しの不安を抱えていた。そのため、夫は自分ができることを見つけて行うということを心掛け、子どもと遊ぶことから始め、おむつ交換やミルク作りなどの育児の方法については、妻から教えてもらっていた。妻は、夫も妻同様に初めての育児であることや子どもと接する時間が少ないことを考慮して、抱き方、沐浴、おむつ交換の方法とタイミングなどを教えていた。

妻が自宅に帰ってきてからの夫の大きな喜びは、申し訳ないと思いつつも妻に家事をしてもらえるということであった。特に、食事についてはもともと自炊をしていた夫にとっても喜びは大きく、妻もそれを受け入れていた。

妻は、自宅に帰る際に、親からの支援がなくなることや話し相手が居なくなることへの不安やストレスがあるのではないかと考え、不安のほうに期待より大きかった。しかし、夫と2人で子どもを育てていかなければならないという思いや、自宅では家事・育児は妻自身が主でやらないといけないという思い、そして里では自分の思うようにできなかったことができるという思いなどを持ち、

自分のやり方で初めての育児・家事に取り組んでいた。

妻子が自宅へ帰って1か月後の頃：「夫婦が互いに気遣い、初めての子どもを育てていく」

夫は妻がずっと子どもの世話をしながら家事もしてくれていることに深く感謝すると共に、妻の疲労とストレスの状態を常に気に掛けていた。そのため、夫は自分ができる家事や育児を見ついたり、妻から頼まれたことをしたりしていた。また、妻は子どもをよく見てくれていることに安心する一方で、もう少し手を抜いても良いのではないかと考えていた。

妻の疲労とストレスの主な原因は、授乳による不眠や子どもの泣き、子どもの様子を見ながら合間に家事をすること、そして日中は話し相手がいないことなどであった。そのため、子どもが長時間泣き止まないことがあまりない場合は、ストレスにはならないと考えていた。

夫の育児・家事の支援については、夫は妻が自宅に帰ってきたときから自らできることを見つけて妻を支援していた場合と、妻の育児・家事のやり方を尊重するために夫自らは積極的に手伝わなかった場合があった。後者は、夫婦相互に手伝ったほうが上手くいくと気づくのに時間を要していたが、気づいてからは、夫は妻の手伝いという位置づけではなく、夫自身の仕事として妻に協力していた。いずれの場合も、妻は夫同様に、夫の育児・家事への頑張りに感謝すると共に、夫の仕事と家事・育児の両立に伴う、夫の健康状態を気遣っていた。

妻の育児や話し相手がいないことへのストレスに対する夫の支援は、妻がリフレッシュできるように、友人を招くことを勧めたり、夫が子どもを預かって妻を外出させたり、一緒に外出したりすることであった。子どもを

伴う外出は、夫婦2人での外出に比べ様々な制限が出てくるが、夫はそれを受け入れ、更に今後の子どもの成長や成長に合わせた家族のあり方を想像し楽しんでいった。妻は、父子の触れ合いを最も望んでいるため、夫が子どもと触れ合ってくれていることや、将来の家族のことを思ってくれていること、そして妻にリフレッシュさせてくれることに感謝していた。

また、自宅で育児・家事を全て行い、その大変さを実感した妻は、妻が再度里へ帰った際に、前回の里帰り中には気づけなかった、実母の育児・家事の手抜きの方法を学んでいた。また、話し相手が居ないことがストレスだった妻は、里でいろいろ話をするによりストレスが軽減されていた。これらの妻やその夫は、里は安心できる場所であり、親から育児・家事を見て学べる場所であることを実感し、心の拠り所にしていった。

(3)結論

里帰り分娩後の3人家族作りには、妻子が自宅に戻ってから1か月以上必要であった。また、里帰り中も普段通りに行っていたコミュニケーションアプリなどの現代のコミュニケーションツールを用いた夫婦の頻繁な連絡は、夫婦関係や父子関係を高めていった。

<引用文献>

島田三恵子, 渡辺尚子, 紙谷整子ら(2001): 産褥1ヶ月間の母子の心配事と子育て支援のニーズに関する全国調査 初経産別, 職業の有無に関する検討, 小児保健研究, 60(5), 671-679.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 0件)

[学会発表](計 0件)

6. 研究組織

(1)研究代表者

保田 ひとみ (BODA, Hitomi)
金沢医科大学・看護学部・講師
研究者番号: 00363119

(2)研究分担者

柳原 真知子 (YANAGIHARA, Machiko)
金沢医科大学・看護学部・教授
研究者番号: 70289990

畑下 博世 (HATASHITA, Hiroyo)
三重大学・医学系研究科・教授
研究者番号: 50290482

(3)連携研究者

西条 旨子 (NISHIJO, Muneko)
金沢医科大学・医学部・特任教授
研究者番号: 40198461